銃後の生活体験

あゝ青春に悔あり　学生残酷物語

兼子玲子
野方一丁目

多くの人々がそれぞれに、空しく恐ろしく悲しい日々を過ごした日本の長く暗い戦時中の年月があった。特に多感な成長期を迎えていた我々昭和初代生まれの世代には、生涯の汚点としてその影を深く落としている。日本の軍隊が昭和十二年七月七日より昭和二〇年八月十五日まで、中国、アメリカ等を相手に戦争をしていた時代である。

私は昭和八年より中野に在住する者であるが、今の中野駅北口を下車すると、左手にはどこまでも高く黒い塀が続いていた。それは陸軍中野学校であって、スパイ学校と称せられ、憲兵学校も併設されていた。国民には目隠しをし、何も知らぬ無垢な子供たちまで戦時教育で洗脳したことには本当に腹が立つ。小学校では、国民に役立つ国民として、朝礼時に乾布摩擦や、走る、跳ぶ、泳ぐ、重量挙げの検定が男女問わず行われ競われた。天皇陛下の写真の掲げてある講堂兼体育館では、雑巾で床を拭き清め、冬でもハダシで男児は剣道、女児は薙刀をふり回して、常に戦闘員としての訓練を強要された。

まだ日中戦争初期の漢江陥落の際の日の丸の旗行列、夜になれば提灯行列の灯の波が今でも美しく瞼に浮かぶ。皇紀二千六百年（昭和十五年）の建国記念日には、市電（路面電車）の花電車の両側に祝う旗の波、束の間の勝利の中にわいた思い出で、私は当時小学五年生であった。

女学校は府立井草高等女学校（都立井草高校）で、鷺宮の畑のまん中に仮校舎があり、二年生の春に上井草に引っ越しをしたのである。全員一人ずつ椅子を持ち、二人でともに机をかついで、雲雀のさえずりを聞く麦畑の中を引っ越しの列が続いた。

一年を過ぎると、体育の時間は教練の時間となり、戦場にいるごとく匍匐前進とか、竹箒を銃剣の代わりとして「突け！」の訓練もした。幼少の頃からの戦時教育下で目隠しをされていたというより、疑いを知らぬ素直な少女期であったのである。

セーラー服と赤いリボンとひだのスカートの入学時のあこがれの制服も、全国的に統一された女学生の制服としてのヘチマえりとウエストにバンドをした上着にかわり、モンペに防空頭

巾を背負ってたびたびの空襲に備える服装で登校した。男子生徒はカーキ色の詰めえり服に戦闘帽、ゲートルを巻いての登校だった。

三年生になると英語は敵性語として選択科目となり、代わりに簿記珠算が教科に入った。そしてその年早々に、上級生とともに田無の中島飛行機で飛行機のエンジン製作のため、カーキ色の作業着に着替えての学徒動員となった。

この工場には自由学園男子部、山梨師範、多賀工専、目白学園、智山中学、巣鴨商業などの学生が、学校名と「学徒報国隊」という文字の入った腕章をつけて動員されていた。女子の学生動員は、我が校だけであった。上級生と私たち三年生は、汗と油にまみれて旋盤と取り組んだり、現場の事務などのそれぞれの職場へ配置された。

毎日昼休みには、工場の芝生と池のある広場に先生と同級生が集まって出席をとり、軍歌を歌って過ごすことでせめてもの学校の雰囲気を保っていた。

その間にも軍需工場めがけてアメリカのP51戦闘機の襲撃があり、警報のたびに職場から離れ山林の方へ避難した。敵機は低空飛行で畑の中を逃げる我々を追い、黒い土ぼこりを上げて銃弾が迫って来ることがしばしばだった。

国内に残っている青壮年の多くは、肺結核で軍隊を逃れた人たちで、軍需工場へ来ていた。私たち成長期の者は栄養不足と慣れない工場作業に加えて、そうした結核保菌者から結核に感染し、ばたばたと倒れる有様であった。当時はストマイなどの特効薬のない時代であり、一日の食べるものがやっとで、ただ寝ているしか治療の手だてもなく、死んでいく者が大多数であった。私もその例にもれず肋膜炎にかかり、その後のレントゲン写真に影が残ったため、戦後の就職に大変苦労をしている。

工場の行き帰りは、敵機の空襲で電車が不通になり、下駄で線路上を歩いての行き帰りだった。やっと家に帰り着いても、夜、空襲警報のサイレンが鳴り響くと、その不気味さにほうぼうで赤ん坊が泣き叫ぶ。電灯を消して防空壕に入り、ラジオの情報で、今夜は家の方向に敵機の襲来がないと知ると、ホッとした気分になったものだ。毎日いつ来るか知れぬ空襲に怯え、今日も命があってよかったなァ、と思う暗い毎日であった。

夜、空襲警報のサイレンが鳴り響いて軍需工場の方向に敵機から照明弾（ナイター試合の明かりと同じようなもので、空中に留まってあたりを照らし出す）が落とされ、あたりがぱあっと明るく照らされる。爆弾攻撃が始まると、日本軍のサーチライト（地上から空に向かって敵機をキャッチするために放たれる）が数条上がって敵機を映し出し、これを狙って、対空砲火の白い噴煙が上がるのが見えたりした。夜の光は近くに感ずるものであるが、まだ家の混んでいなかった東京で、わが家の二階から田無方面上空が見えたのである。

白米は入手困難となり、代用食として小麦粉、さつま芋、大豆、ふすまなどが、家族の人数分としてほんの少量渡されるのだった。それから衣料品（スフという人造繊維が材料で、洗濯すると直ぐ破けてしまうもの）、煙草もすべて切符の配給制で、甘い菓子類などは全然なかった。配給の小麦粉をといて団子をつくり、家庭の菜園で出来たカボチャや菜っ葉入りのスイトン汁が家族の最大の御馳走であった。

敵機の襲来を告げるラジオも、時々たたいてやっと鳴る代物であった。そして近所の人々も田舎のある人は疎開して、顔見知りも少なくなっていた。また軍の命令によって、疎開して空き家になった家とか、通りの角々に建つ家は強制的に取り壊され、本土の空襲による火災被害を食い止める方法がとられた。

私の下には女学校一年生の妹と、小学五年生の妹と小学三年生の妹と小学一年生の妹がいた。女学校一年の妹は家から堀の内の学校まで、下駄での通学で足が痛くて泣いていた。小学五年生の妹は福島県信夫郡桑折町の大安寺のお寺に、小学三年生の妹は飯坂温泉に学校及び学年毎の集団疎開で我が家を去って行った。集団疎開した妹の話によると、夜になるとお腹が空いて、また母親恋しさに一人が泣き出すと、全員が泣く日々であったという。小学一年生の妹は、朝学校に行くが、警戒警報（空襲警報の前の段階のサイレンによる警報）になると家に帰されて勉強どころではなかったという。今や、みんな六〇歳前後の老女たちである。

昭和二〇年五月二五日夜の十時過ぎから翌二六日未明にかけての空襲で、家の周り一面火の海に包まれてしまった。今までは、見物しているような気分の空襲だったが、遂に我が家に来たかと思われた。次々に来襲する飛行機から爆弾、焼夷弾が落とされ、列車が頭上より縦に突進するような音が頭と耳をつんざき、そして一面パッと明るく閃光が走るとたちまち火の手が上がる。幼児の甲高い泣き声に次いで母親らしい悲鳴が聞こえ、あちこちで大勢の人々の阿鼻叫喚が続く。春とはいえこの頃は大変寒かった。折から夜風にあおられて火の手はどんどん広がって行った。私は間近に見たこの世の地獄の恐ろしさに、庭につくった防空壕の中で泣きながら祈り耐え続けた。防空頭巾をかぶった母と妹二人も燃える表の明るさとは裏腹に、暗い壕の中でじっとしていた。父は壕の外で火の情況を知らせたり、消火のために畳を水で浸して壕の入口へ置いたりしていた。今夜こそ、もうこの家ともお別れだと思い、がっくりした。そして悪夢の深夜の空襲が解除になるや否や、うとうと一眠りしてしまった。

目が覚めて壕の戸をこわごわ開けると、ひんやりした空気が入り込み静かに朝日がさしていた。どうやら我が家は助かったのだった。付近を歩いてみたがどうやら我が家の周辺のほんの少しだけ焼け残ったようだった。ただただ、見渡す限り遠々と

続く真っ黒な焼け野が原は、まだ黒い煙が立ち上がっていぶっていた。近所の人の話では、途中で風の向きが変わったため助かったらしい。東は今のＮＴＴ野方電話局のあたりまで焼け、北は野方小学校も半焼、西南西の被害はひどく、早稲田通りに立つとＪＲ高円寺駅まで黒々と見渡せ、その先もまだまだ真っ黒な焼け跡の続く町となっていた。

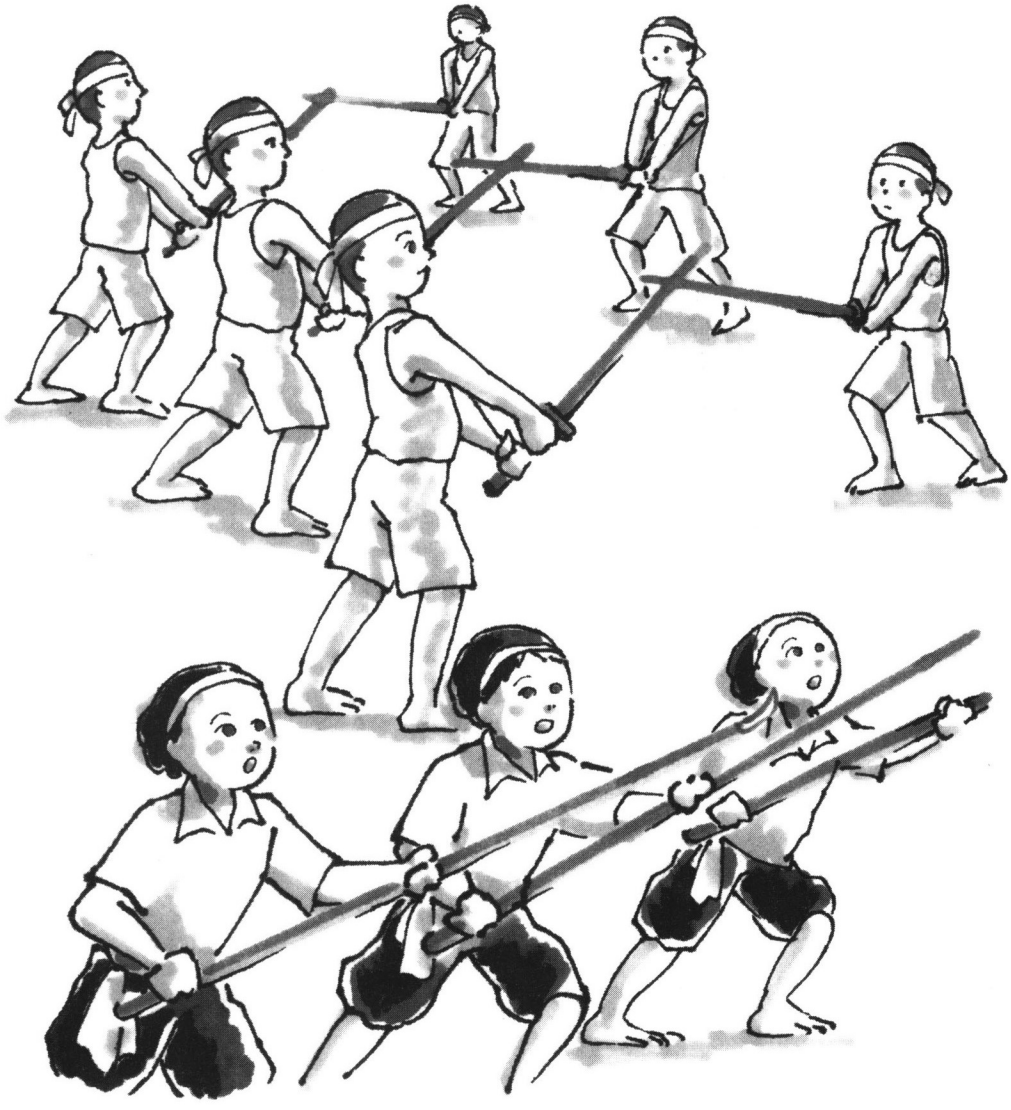
その年の夏、広島、長崎の原子爆弾投下があり、昭和二〇年八月十五日正午、天皇陛下の終戦を告げる言葉を工場の広場のラジオで全員一同集まって聞いた。その後のラジオや新聞の報じた戦果は「敗戦」であった。

私の叔父の家には、早稲田大学在学中の二人の従兄弟がいたが、学徒出陣で出征し、ビルマ近くのインパールで二人とも戦死、叔父叔母は跡継ぎを失い、どこにもぶつけようもない遺恨を残して老死してしまった。

私たちは工場動員から学校に戻り四年生となり、また一年間一生懸命勉強したが、一緒に動員された一年上の上級生は、工場から四年で卒業させられた。本当にお気の毒な思いがしてたまらないのである。学生は勉学が本分であるはずであるのに、無駄な工場動員に時間を費やし、戦後は毎日の食糧難に脅かされ、勉学に集中出来る時代ではなかった。私は東京第一師範に進学したけれど、一年生の終りで肋膜炎に倒れ、治療薬もなくやむなく中途退学してしまった。私たちの年代では小学校の修学旅行にも、女学校の修学旅行にも連れて行ってもらえなかったし、学生生活は暗く辛い思いのみであった。戦後のクラス会で、夜間の工場勤務とかに対して、校長、教師に父兄から非難の声が寄せられたという。

最近は世界のどこかで戦争が多発している。国情による民族間の紛争や抗議テロであったりする。また武器を輸出している国が多く、多くの大人や子供までもが武器を手にして、人の命を抹殺している。そして、その悲劇は広がるばかりである。「目には目を、歯には歯を」でその争いは激しく、根深く長期化している。自国で収拾できず、国連に問題が持ち込まれ、我が国にも平和維持活動を要請される有様である。国民の代表であるべき大臣及び代議士は国民の意見も聞かずに、国連常任理事国入りしたいとか、そのために憲法を改正しなければならないとか、簡単に発言することは差し控えて欲しい。

世界の中の日本国には、将来も真の平和と自由に満ちた、豊かな国造りを祈って止まないものである。二度と若人が戦争に派遣される悲劇の道をたどらないよう、皆で見守って行かなければならない。

過ぎ去りし戦争の年月は、生涯私がいくら叫んでも決して報われることも償われることもなく、ただ時代の波に押し流されるばかりの空しい青春の体験であった。これから老いて行くに当たって、残りの人生こそ平和で暮らし向きのよい日々の送れ

ることを、強く願って止まないこのごろである。